
愛とか恋とか友情とか！

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛とか恋とか友情とか！

【Nコード】

N0875U

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

とある大学のオカルト研究会に入って二ヶ月、僕は先輩の一人にべたばれしていた。嫌な部長。普通の小野乃木。学校に來ない鹿取さん。誰もオカルトなんて信じてない研究会でまったり愛とか恋とか友情とかする、地に足のついてない青春擬き小説。

ゲーム

部室のドアに『囲碁サッカー部 部員ログイン中』と書かれた紙が貼り付けられていた。

「……」

三秒見つめる。隣の部室を確認する。いつも通りに麻雀研究会がジャラジャラと牌を掻き回している。ちょっと混ざりたい。リーチとタンヤオとトイトイとチートイツくらいしか役を知らないけど。ふむ、麻雀研究会の部室が左隣にあるということは間違いないここは我らがオカルト研究会の部室であるはずだ。「囲碁サッカー部」なる謎の部活動の侵略を受ける謂れも特にはずなので、これはきつとあの螺子の一、二本外れている先輩達の悪ふざけの一環なのだろう。囲碁部とサッカー部の関係者各位に怒られてしまえ。

僕はドアを開けた。

「セクハラです」

紫さんが落ち着いた声で言う。目は汚物を見るような冷酷とも侮蔑とも違う何かで固められていた。人が殺せそうだ。「ええと、あの……？」部長がその向かいで困っていた。助けを求めるように僕を見てくる。紫さんと部長は机を挟んでいるので、少なくとも物理的なセクハラではないようだ。僕は溜め息を吐いた。

「部長、紫さんに何したんです？」

「みんなが俺を悪者扱いする！」

まあ部長の外見の胡散臭さときたら他にない。社会人のようにも見えれば、高校生のようにも見える。

辛酸と労苦を重ねたようにも見えれば、軽佻かつ浮薄であるようにも見える。

見る人によって与える印象がまったく違う不思議な外見だ。

ただし大学生のようには見えない。

中身のほうはみんなが一貫して「バカだ！」と評する。それはそ

れで素敵なことだなあ。

対して紫さんはオカルト研究会の紅一点だ。いや、ミス翔大とかいうものがあればぶっちぎりでトップを取れる大変と言うか花丸な美人さんだ。目鼻がくつきりしていて、頬から顎の曲線が細く美しい。なんていうかあらゆるパーツに無駄がない。

だから僕は部長と紫さんなら一刹那も迷わずに紫さんを取る。

「俺はたださ、紫にメアド訊いただけなんだよ？ 部長として当然だろ？ むしろなんで部長が二回生のメアド知らないんだよ！」

「ね、セクハラでしょ」

「セクハラですね」

「俺もう部長やるのやだ！」

なんか涙目になって飛び出して行った。やった。部長いなくなっただ。紫さんと二人きりだ！ やっほおい！

いいや、落ち着け。こういう時こそ平常心だ。とりあえず荷物を降ろして紫先輩の隣に座ろう。

「……ちっ」

僕には何も聴こえなかった。紫さんが僕が隣に座ったくらいで舌打ちなんかするはずがない。僕に背を向けるようにしてバッグから本を取り出して邪魔者のようにそそくさと椅子を動かすはずなんてない。タイトルを覗き込んでみると『あなたにもできる13の完全殺人』とあった。

へえ。バツカじゃねーの。完全殺人なんて簡単だろ。難しいのは殺人を行ったあとに平常通りの生活が続けることだ。

殺人なんてなかったかのように、事件の話が出たときに早まる心臓の鼓動を押さえつけることこそが、罪悪感を殺すことこそ、人間には不可能なのだ。

ふと気づくと、紫さんが僕をじっと見ていた。すごく怪訝そうな目で。

「読みたいの？」

「え、いや、そうじゃないんですけど」

「私はもう読み終わってるから貸してあげるわよ？」

「ほんとに違うんですよ」

「じゃあなんで見てたの？」

「ええと、本を見る振りをして紫さんの横顔を見てたんです！」

「あらあらあら気持ち悪い」

あっさり拒否された。泣きそうだ。

「ところで鬼ヶ島がこの時間に来るなんて珍しいわね。サボリ？」

「ええ、先週言ってたゲームのハード持ってきたんですよ。重かったから先に部室のほうに来ちゃいました」

「あんたね、鹿取みたいになっちゃダメよ」

「むしろ懂れますけどね、あの人」

ある種の超人じゃないだろうか。大学生の理想形を一つ体现した人間なんじゃないかとすら思う。

なにせ授業に一つも出ずにフル単位を取っているのだから。

「……ていうかいまこの部室に鬼ヶ島と二人きりなのね」

「露骨に嫌な顔しないでください。傷つきます！ 部長と二人きりよりマシでしょ」

……………。

あれ、なんだこの沈黙？

「そうね」

そして心なしか声が素っ気無い。即答して欲しかった。そもそも部長と天秤に掛けて欲しくなかった。

落ち込みかける。でも落ち込んでるひまはなかった。二人きりのいまがチャンスだ。先週から綿密なシュミレーションを重ねた作戦を実行にはいまいかない。

僕はバッグの口を開けた。

「あらあらあら。新手の鈍器かしら」

ニャンテンドーの一世代前のハードであるゲームキューフを見て頬を綻ばせる。……形状的に撲殺できなくはないかもしれない。角とか痛そうだ。握りもついている。

「あ、わかってると思うけど、冗談ね」

「はい」

紫さんのツボはこの数ヶ月でだいたい掴めてきた。ようするにこの人は「そういう物好き」なのだ。

鈍器。凶器。死体。凶悪事件。

そういえばこの間、山奥で見つけた死体のニュースを一件残らず録画しているんだと目を輝かせて話していた。

だから友達いないんですよ！　ってつつこみたくなったけどガチで傷つきそうだからやめた。

どんな経緯があってそういう場所に辿り着いたのかは知らないが、僕としてはいまの紫さんが好ましいと思うのでとりあえず無問題である。

「よかったら一緒にやりませんか？」

僕は一緒に持ってきたソフトを紫さんの前に置いた。大乱島クマッシュブラザーズである。相手のキャラクターを吹っ飛ばしたり叩き落としたりして、大乱島を我が物にするためにニャンテンドーのいろんなゲームから参加した、総勢二十八人のキャラクターが大暴れする大ヒットゲームだ。

美人はゲームが弱い。と僕は勝手に思っている。そして数ヶ月の観察の結果、紫さんは大変な負けず嫌いだと判明している。どんな些細なことでも負けたら本気で悔しがるタイプだ。

しかし負けず嫌いという生き物は往々にして負ける勝負はしない。そんな紫さんに乗せるためにこの一週間寝る間を惜しんで考えてきた二十三の挑発パターンをお披露目する日がようやく――

「いいわね。やりましょう」

少し沈黙のあとではあったけれど、紫さんは確かにそう言った。

「え、ええ」

かなり拍子抜けしつつ、僕は配線を繋いでメモリーカードとコントローラーを二つ差した。片方を紫さんに渡す。紫さんは握り心地を確認するように、ボタンとスティックを軽く操作する。当然画面

はまだ真っ暗なのでなんの反応もない。

ともあれ「ゲームでフルボッコにして涙目の紫さんを眺めてニヤニヤしよう大作戦」スタートだ。

正直こんなにあっさり行くとは思っていなかった。多少の暴言を吐く覚悟もあった僕は、胸を撫で下ろす。ここまで来てしまえば、あとは紫さんの操るキャラクターをフルボッコにするだけだ。

にしても大学の部室ってすごく自由な空間だよなあ。煙草と酒と火事と麻薬と淫行以外は、だいたいのが許されるんだから。そもそもこの部室にオカルトと関係のあるものってどれくらいあるんだろ。テレビとか対極だろ。あ、でも貞子はテレビから出てきたっけ。僕はテレビとハードのスイッチを入れた。

対戦モードである「大乱島」を選択し、キャラクターの選択画面になる。僕は「ボックス」を選んだ。紫さんは「セルタ」を選ぶ。

ステージはランダム選択にすると飛行船の上にかっこつけて僕の選んだ狐が登場。魔法っぽい演出をしながら紫さんのお姫様も登場。カウン트가ゼロになり戦いの火蓋が切って落とされた。お姫様が変身、全身青タイツになる。平面状にいたので僕は先ずレーザー銃を連打。しかし跳躍した青タイツの軌跡を追うだけ。接近してきたため僕は後退し、攻撃範囲から逃れ、青タイツの着地と同時にクマッシュ攻撃を仕掛ける。ボックスのクマッシュは結構範囲が広いので届くはずだ。ちなみにクマッシュとはスマッシュとクラッシュを掛けた造語らしい。だがクマッシュは、いきなり地面を滑るように動いた青タイツにかわされた。そのまま方向を転換、攻撃直後で動けないボックスを掴んで二回殴ったあと下投げ。青タイツの下投げには上に跳ね飛ぶ性質があり、青タイツはジャンプし空中で蹴りを繰り出す。見事に命中、跳ね飛ばされる。体勢を立て直そうとしたが、二段ジャンプした青タイツがもう一度蹴りを的中させる。鬼か！ 大乱島から叩き出された僕は復帰のために飛ぶが、壁際で待ち構えた青タイツが僕を画面外へ吹き飛ばした。

あっという間に三回吹き飛ばされて大乱島は青タイツの物となっ

た。

「えっと、紫さんめっちゃ強くないですか。なんでそんなに強いんです？」

「聞いて驚きなさい」

その前振りをされて驚いたことないよ。

「中学三年間友達がいなくてひまだったからレベル9のCPUを三人ハメなしで倒せるようになるまで極めたのよ」

「驚いた?!」

そもそも女の子のハマる類のゲームじゃない気がするんだけど、これはまあ偏見か。

「元々兄が持ってたんだけどね」

言い訳のように付け足す。ちよっと恥ずかしそうだ。紫さんって化粧薄いし、ファッションセンスがとても残念ではあるけど、女の子であることを捨ててるわけじゃないんだよね。

「て、あれ? お兄さんとはやらなかったんですか?」

「お兄さんとはやらなかった、って響きがやらしいわね」

「やらしいのは先輩の頭だ!」

「あらあらあら。あなたにだってパソコンを漁ればエロ同人誌のデータが山ほど見つかったりしないの?」

「それとこれとは話が違います!」

「そうね。あなたは百合専門だものね」

「バレてる?!」

「兄は私に掠り傷一つ負わせることができなかったわ」

「ここで話を戻すんですか?! いや、話題を逸らしたかったのは確かなんですけど」

「あなたのデ IPP な百合話なんて聞きたくないもの」

「ごめんなさい……」

「あなたは頑張ったほうよ。私に六十パーセントもダメージを与えることができたんだから」

「……えっと、どうも」

なんだか絶対的強者からの哀れみ的な言い方だった。

「どうする？　まだやる？」

「はい。やらせていただきます」

僕は諦めていなかった。いくら紫さんが強くても、対人戦になれているわけではなさそうだ。実際六十パーセントのダメージを与えることはできたのだ。隙がない訳ではない。そして紫さんは決してメンタルが強いタイプではない。褒め殺して動揺させてみよう。

「紫さんって細いですよね。肌白くてきれいだし」

「一時拒食症だったからね」

墓穴を掘った。というかそんな重い事実をあっさり話さないで欲しい。オープンすぎる。あ、でも、もしかしたら信頼されてる証だったりするのかな？

「モナリザとか、ダビデ像とか、世界に名だたる美術品も紫さんの前では霞んでしまいそうですよ」

「鬼ヶ島は美術館に謝ってきたほうがいいと思うけど、四十五歳のおばさんや全裸のおっさんと比べられても困るわ」

冷静に諭されてしまった。

ちなみに口を動かしている最中もゲームは続いている僕はフルボッコにされ続けている。なんか十パーセントもダメージを与えられないようになってきた。

くそ、こうなったら。

「好きです！」

「私は嫌いよ」

むしろ僕が動揺した。ボタン操作を誤った僕のキャラクターは谷底に落ちて行く。残機がゼロになる。画面が変わり、配管工兄弟の弟のほう画面に向けてドヤ顔で勝ち誇っている。

「このゲームのいいところは誰も死なないことね」

「え？」

「吹っ飛ばしても落ちても血は流れない。それに戦いが終わったあとにはみんなて手を叩いて勝った人を称えてる」

なんか吹っ飛ばしても落ちても死なないことを、昔テレビで子供が「人間を殺しても死なないと思うようになる」とかで問題にした気がする。まあ僕は「ゲームの影響で犯罪を起こすようなやつはゲームをやっでなくても犯罪を起こす説」に賛成してる。いくら子供でもそこまでバカじゃないだろ。

「……そうですね」

「羨ましいわ。実際には勝者は賞賛よりも妬みを受けるんだから」
必ずしもそんなことはないと思うけど黙っておいた。紫さんがコントローラーを置く。僕をフルボッコにするのに飽きたみたいだ。

「今度は紫さんに勝てそうなのやつ持ってきますね」

「例えば？」

「ええと、ジャリオカートとか」

「鬼ヶ島」

とても静かで落ち着いた声で紫さんは言った。

「私の三年間をなめないで頂戴」

遠い目だった。僕を見ていなかった。過去の何かを見ていた。

「ごめんなさい」

「いいのよ。鬼ヶ島のデリカシーの無さなんて始めて会った日にわかってるから」

「僕、初日になんかしましたっけ」

「一目惚れしました！ って大声で宣言したのをもう忘れたのかしら」

ぎゃー……。そういえばそんなことした気がする。僕というやつは外堀を埋めるといふ行為が恐ろしく下手なのだ。

「あなたほどオープンな――」

部室のドアが開いた。部長だった。

「ちっ」

「ちっ」

僕らは同時に舌打ちした。ほんっと部長って空気読めないよな。タイミングを悉く悪いほうに外してくれる。

「あのさ、俺、何も悪いことしてくれないよね……？」

「氷川くんが存在するのが悪い事なのかもしれないわね」

「泣いていい？　ねえ泣いていい？」

「いいですけど誰も慰めませんよ」

ほんとに泣き出した。というか隅に座り込んでいじけだした。

「ほっときましょうか」

「ほっときましょうね」

こういうとき紫さんと息があって僕はとても嬉しい。部長にも利用価値があるものだ。扱いが酷すぎる気がしなくもない。

「えーと、とりあえず氷川さん。微妙に邪魔。退いて」

あとから入ってきた小野之木が爪先で部長を二度つつく。

「やめるよ？　俺やめちゃうよ？！」

「どうぞ」

三つの声が完璧にシンクロする。再び出て行こうとした部長の襟を小野之木が掴んで足払いを掛けた。引き上げ気味に痛くないように地面に落とす。下向きに襟を力を掛けて動けないようにする。さすが高校柔道全国大会出場者。なんでオカ研入ったんだろ、こいつ。僕みたいに紫さん目当てか？

「とりあえず俺をこの空間に一人にしないでください」

困った目で僕を見る。ああ、知らない内に殺気丸出しの視線で小野之木を見ていたことによりやく自分で気づいた。紫さんは僕のだぞ。あげないぞ！

「いやん」

当の紫さんは小野之木が部長を押し倒しているのをB.L的光景に置き換えて萌えている。その横顔は熟した林檎みたいに、思わず齧りつきたくなるくらい魅力的で、僕は自分の腕を抓って耐える。

「いいんだ……。俺なんてもういなくてもいいんだ。どうせ人間に生きてる意味なんてないし、地球を汚すだけの存在だもんね。人間のいない地球ってシンプルでわかりやすく素晴らしい樂園だったと思うんだ」

小野之木の下で部長が人間規模にまで膨らんで自虐していたけど、もっと身近なところから反省して欲しい。だいたい小説でもない限りifに意味なんかないのだ。実際人間がいてしまったんだから仕方ない。究極的に言えば意味なんかどんなものにもないのだから、できる範囲で楽しく過ごせばいいと思う。

という誰でも思いつくような否定的自己肯定論を紫さんの横顔を眺めながらぼけーっと考える。うん、楽しいは正義だ。だからスポーツとかいじめとか虐待とかはなくならない。最近運動してないなあ。

「ところで鹿取先輩は？」

小野之木が暇潰しに部長の関節を極めながら訊く。

「サボりでしょ」

淀みなく答えたのは紫さん。そういえば僕も新歓以来あの人と顔を合わせてない気がする。ついでに一度も顔を見ていない人がいることも思い出す。名前だけ名簿に書かれてたけど実在するのかな、あの人達。ちょっと訊いてみたい。

「そういえば新歓のとき三回生が二人出れなかったんですよ」

「え、三回生二人がデレなかった？」

「違う」

「あっはっは。君らは愉快だね」

「部長が加わることで不快になりますが」

あっさり受け流して部長は首を捻って小野之木を視界に入れる。

「そういえば小野之木、こないだ鹿取とどこに行ってたんだい？」

「え、……ああ、例のグルメ旅行につき合わされてたんですよ」

「深夜にかい？」

「……夜にしか開いてないラーメン屋があるんですよ」

「いいね。今度俺も連れて行って欲しいな」

「ところでそろそろいい時間ですし、ミーティング始めませんか？」

「あ、うん。そうだね」

関節を極められて押し掛かれたままよく普通に会話できるなあ。

なんか気持ち悪いなあ。

さすが部長だなあ。

「んじゃみんな座って」

小野之木が部長の上から退く。紫さんはいつも通り下座を譲らない。出口から一番近い場所にいないと不安なのだ。同様に僕も紫さんの隣を譲らない。紫さんの隣でないと落ち着かないのだ。部長は一番上座で、バッグからノートパソコンを出した。小野之木は僕の向かいに座る。

「じゃあ、オカ研ミーティングを始めます。よろしくお願いします」
「お願いします」

「んで今日なにするんです？」

「そうだね。こないだの連続殺人の話でもしうか」

「それってオカ研の範疇です？」

「細かいことは気にしちゃいけないよ。所詮大学の研究会だ。どうせならあざやかに解決してミス研の鼻を明かしてやろうじゃないか」
部長はミス研に恨みでもあるのか。

そもそも解決できる見込みがあるのか。

「紫、ニュースで出ている情報を教えてくれないか」

「呼び捨てにしないで。セクハラだわ」

「俺さ、最近冗談拔きの本気で紫に嫌われてるんじゃないかと思ってきたんだ」

「いまさらですか」

「あっはっは。泣くぞ。ガチで泣くぞ」

全員が押し黙る。泣けば？　って感じた。誰も喋らないので仕方なく紫さんが「五月〇日。大阪府××市、ゴールデンウィークを利用して両親と一緒にキャンプに行っていた姉妹がきれいに三つ並んだ腐乱死体を発見。死体は三つとも不特定多数の部位を切り取られていたそうよ。具体的には二の腕、内臓、舌、頬肉、背中、腿。ただ奇妙なことに腹だけは三体ともキレイになかった。被害者は歯の治療痕や失踪届けなどから

『青葉充、四十二歳、会社員。三月五日の昼休みに会社を出て戻ってこなかった。』

三上真一、三十四歳、市役所勤務。夕方頃、出会い系サイトであった女との待ち合わせに向かってそのまま戻ってこなかった。ちなみに女のほうはサイトの用意したサクラではなから行く気はなかった。

相川紡、四十歳、小学校教師。深夜にコンビニに行こうとしてそのまま戻ってこなかった。』

この三人だと断定。傷跡は蛆が沸いてひどいことになっていたそうよ。他に訊きたいことはあるかしら」と言った。

とりあえず僕の知っている内容よりも多少えぐい。所詮僕はニュースサイト程度しか見ないから当たり前かもしれない。

「ありがたい。ところでいまのから推察される犯人の目的は何か、わざわざ死体を切り取る意味はなんだろう」

わかんない。

部長は僕を見る。なんか言えと促されてるらしい。ううむ。

「その部位に犯人を示す何かが残ってたんじゃないですか」

「うん、実に論理的な答えだ。僕は鬼ヶ島くんのそういうところを高く評価してるよ」

外したことを喜んでるみたいな笑みを浮かべる。僕だって外れだとわかってて言ったけど多少ムカつく。不特定多数の部位に証拠が残るような殺し方なんて思いつかないし。

部長って外見はイケメンっぽく見えなくもないんだけどこういうところがなあ。ていうかオカルト研究会の面々って（僕も含めて）問題が内面に集中しすぎてるよな。紫さんに至っては世界中のどこに出しても恥ずかしくない美人さんだし。

「部長はどう思うんです？」

「ん？ わかんない」

……………。

なんかイラっときた。

「考えてみるよ鬼ヶ島くん。一般人の気持ちもわからない俺なんだから、殺人犯の気持ちもわからないに決まってるだろ」

ああもう、この自己中め。

「小野之木、君は何か知ってることとかないかい？」

「ないですよ。俺はそういうのあんまり興味ないですから」

興味津々なのも紫さんくらいだと思うけど。何気なく僕は横目で紫さんを見た。

「たべるため」

紫さんは恐ろしく平坦な声が場の空気を凍りつかせた。

「ただの自説だけどね」

と、いい訳みたいに付け加える。

「根拠は？」

訊かなくてもいいことを訊いたのはやっぱり部長だった。この人、一つもいいことしないな！ ノーパソになんか打ち込んでいる。

「みんなは焼肉だと何が好きかしら？」

すぐこの雰囲気で答えたくない質問がきた。僕は黙っていかんと思ったが、やっぱり部長が「ハラミかなー」とか言いやがって、小野之木も「カルビ」と乗った。三人が僕を見ってくる。

「タンばかり食べてて鬼タンという渾名がついたくらいのタン好きですよー、僕は」

投げやりに答えた。

「私はミノが好きね。噛み応えあるものが好きだわ」

へえ、そうなのか。今度食事に誘うとき用に覚えておこう。

「死体は三つ。左から順に腐敗がひどかったらしいわ。一番左の欠損部位はお腹、胸、内臓、頬、背中ね。ハラミ、カルビ、ホルモン、ツラミ、ヒレ、あたりかしらね。詳しくは覚えてないけど、確か真ん中は肩と腿がなくなっていて背中と内臓が残ってたわ。一番右も背中と内臓が残ってた。察するに、不味かったんじゃないかしら。一つの死体で全部を試さなかったのは、時間が足りなかったから。食べきる前に腐り始めてしまった。そんなところじゃないかしら」

なんかリアルじゃなさすぎてお腹が空いてきた。焼き肉食べたい。ねぎ塩タン食べたい。でもカロリー高いんだよなあ、あれ。

「さすが紫、……君だね」

「人間って美味しいのかしらね」

少なくとも美味しいと思う。

紫さんはつまらなさそうに頬杖をついた。自説が特に正しいとは思ってないのだろう。まあ突飛だしね。

「動機がこれでも犯人とはまったく結びつかないと思うけど」

「ちょっと待っててくれ。……お、きたきた」

「部長、何やってるんです」

「スカイプ」

「小野之木、パソコンってどうやったら壊れるかな」

「窓から投げ捨てたら充分じゃないか」

「それもそうか」

「わーわーちょっと待って二人とも」

ミーティング始めておいて一人だけスカイプなんてやってる部長がどこからどう考えても悪い気がしたが。

「知り合いの知り合いの知り合いがさ、犯罪者のプロファイリングみたいなのを趣味にしてるんだ。それでいま紫が言ったようなやつデータのプラスしたらどんなのに当てはまるかやって、もらってたんだよ」

「遺言はそれだけ？」

「なんでここでその台詞が出てくるの?! ……まあいいや。読むよ。」

『これまでの犯行の情報——会社員の一人が失踪したとされているのが昼休みのわずかな間で、小学校教師が仕事終わりの夜中だったこと——から比較的時間に余裕のあるフリーター、あるいは学生と思われる。』

例えば小野之木みたいだね。

『それまで発見されなかったのはゴールデンウィークに三つまとめ

て死体を捨てたから。つまり死体を自分で管理していたことから一人暮らしと推察される』

例えば小野之木みたいだね。

『財布などには一切を手をつけていないことから比較的金には困っていない』

例えば小野之木みたいだね。

『被害者はいずれも大柄の男性で、犯人が女性だとは考え辛い。犯人は何らかの格闘技の経験があるかもしれない』

例えば小野之木みたいだね。

『過去に成功して注目を浴びていたが、それが過ぎ去ってしまったもう一度注目を浴びたいがために殺すこともあるのかなとか』

例えば小野之木みたいだね。

「部長、小野之木のこと嫌いなんですか?!」

「金持ちの息子とか死ねばいいと思う!」

「私はそんな氷川くんが嫌いだよ」

「うん、俺もこんな俺が大嫌いだよ」

……窒息しそうなレベルで空気が悪い。小野之木、俯いてないでなんか言ってくれよ。

「じゃあ、今日のミーティングはこれまでで。ひまだったら次回もこのネタ引き摺ろうと思うから、なんか言うこと考えといてね!」

そして窒息性の屁じゃないガスを振り撒いた張本人はさっさとノーパーソを閉じて帰り支度を始めた。沈黙が異様に気まずい。何喋っているのかわかんない。部長が出て行く。

「何考えてんだろうなあ。あの人」

「何も考えてないんじゃない?」

その通りっぽかった。

「あ、えー、じゃあ、俺も帰りますね」

「あ、うん、お疲れー」

「お疲れ様です」

「……さて、二人きりですね」

「そうね。特になんの意味もないけど二人きりね」

「ゲームの続きやります？」

「まだボコられ足りないの？」

「なんか紫さんにいじめられるという新しい快樂に目覚めてきました」

「鬼ヶ島、あんた最近リアルに気持ち悪いわよ」

「あっはっは」

僕らはゲームのスイッチを入れた。

誰も死なない、画面の中の闘争が始まる。

うん、平和が一番だ。

血なまぐさい話とか変わった話とか、そういうのは高校までで終わってる。

僕は紫さんとハッピーな大学生活を送るのだから。

あ、どうでもいいオチを一つ。

次の日小野之木は大学をやめた。

もっと言うと音信不通になった。

理由はまったく見当がつかない。

なんでやめちゃったんだろうか。

二ヶ月程度の付き合いだけど部長のあれくらいの軽口は流せるやつだと踏んでたのに。

数少ない僕の友達がまた一人減ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0875u/>

愛とか恋とか友情とか！

2011年6月15日13時40分発行